

## もっと知ろう “陶” 34.方言昔話(6) 弓掛けの松

昔々の話しだけんどの一、猿爪の留主ヶ入（るすがいり）に働き者の権平とおよねという夫婦が住んどった。二人は長い間子宝に恵まれんかったけど、やっこさ一粒種を授かっての一、そりゃあそりゃーどーらー可愛がって一生懸命育てとった。

ある時、その児が下痢を発病しちゃっての一、痩せるばっかでちっとも治りやせん。見かねた近所のもんが「疫病かもしれんな一。吉良見の西山の呪い（まじない）師に頼ってみたら。」と言うもんで、権兵夫婦はそれに従い山越えて吉良見まで行くことにした。暗い夜道をおよねが先導で権平が児をおぶって富ヶ入道に差し掛かかるがさ一と、道ぐるに人が倒れとる。よ一見ると侍らしき男が行き倒れとるでないか。見過ごす訳にもいかんもんで家に連れて帰り、水と塩とご飯を男に与えるがさ一と男は力を取り戻一たみたいで、どーら一二人に感謝した。

男は二人の話しを聞くがさ一と、「明日の朝早いとこ、この地で弓を探せ。その弓の基に墓蛙（ヒキガエル）の陰干しを煎じたもんがあるからそれを飲めば治る。」と告げるがさ一と闇の中を富ヶ入方向に消え去った。

権平夫婦は狐に化かされた様な気分だったけど、もう遅いからと吉良見へ行くことはあきらめて床に就いた。

翌朝早く、侍に言われたように昨夜の地に行ってみるがさ一と、弓が松の枝に吊り下がって、その下に竹の水筒が置いたるやないか。権平は「夢のようだな…、化かされたかな？」と思いながらも家に持って帰り、児に飲ませるがさ一と、なんと半時ほどで下痢が止まっての一、どーら一元気になったじゃないか。

権平は大喜びで、洞の人んた一にその話をするがさ一と、忽ち洞中のもんにその話が広がり、洞人んた一はその弓が吊り下がった松の木を弓掛神と呼びその木を崇めた。

その後、洞人んた一には弓掛神のおかげで一、食あたりや生水による下痢が無くなり、また早世の子供も洞から消えたんである。



弓掛の松は猿爪「留主ヶ入」と「室屋」の間の山の中腹にありました。この話しは恵那郡史（陶は昭和29年まで恵那郡）では、弓ではなく鎧（よろい）が掛けてあったとして「鎧掛の松」として紹介されています。明治の初め、枯れてしまった松の木の一部は東町の景山一族が守る景清神社に奉納されました。侍大将悪七兵衛景清が弓や鎧を掛けたとも言われています。